

ロラン・バルトの「味わい」

あるいは

Le corps de R. B.

浅 沼 圭 司

「この文章は、『ロラン・バルトの美学思想』と名づけられるはずのテキストを構成する——あるいはそこから任意に切り取られた——一つの断片として書かれる」⁽¹⁾

「ジョルジュ・バタイユをどう分類するのだろう。この文筆家 (écrivain) は小説家なのか、詩人なのか、随筆家なのか、経済学者なのか、哲学者なのか、神秘家なのか。答があまりにも難しいので、文学の入門書ではバタイユはおおむね意図的に言い落されている。実際は、バタイユは

幾つかのテキストを、⁽²⁾ いやむしろ常にただ一つのテキストをおそらく書いたのだ」

ロラン・バルトがジョルジュ・バタイユについて書いたこの文章は、その中の「バタイユ」を「バルト」に置換えれば、ほぼそのままバルト自身にもあてはまるのではないだろうか。だからたとえばバルトを美学者として捉えたり、あるいはバルトの美学思想について論じることほど無意味な、そしてバルトその人に反することは無いと言うべ

きかもしれない。にもかかわらずこのことは企てられなければならないように思われる。確かにその仕事は、美学という一つの学問領域に収まりきらないとしても、むしろ現在の美学の側にバルトの検討を必要とする何かが存在していると考えられるからである。「学」としての整合性や安定度の幾許かは犠牲にしても、生きた美的・芸術的現象との関係を保とうとし、固定化やドクサ化を可能なかぎり避けようとする美学にとつては、バルトの仕事は最も重視すべきものの一つ、最も有力な活性源の一つと考えられるのではないだろうか。近代末から現代にかけての芸術の自律的展開が、在来分類基準に基づいた領域の自律性をむしろ否定する傾向を示しているように、美学の自律的展開もまた近代的な学問の領域性を超える動きを次第に示しつつあると考えることも出来るだろう。いずれにしても、少なくとも現時点においては、バルトを美学上の問題として扱うためには、まず美学の側で相応の手続き⁽³⁾を行う必要があるが、それはこの断片においては行われない。

相応の理由と要請に基づいて、バルトが美学的検討の対象になったとして、それによってバルトのバルトたる所以が失われることがあるのなら、それはバルトにとっては勿

論のこと、美学にとつても無意味なことと言うべきだろう。確立した一つの「学」が、その領域に典型的には所属しえない（と判断された）現象を対象として採り上げる場合、予めその現象を自らの対象として相応しい性質のみに還元し、そのうえで検討を行うという方法がとられることが確かに多かったが、そうした方法の多くは単に「学」のドクサ的性質を強めたにすぎなかった。しかし「学」が自らの活性化を図ろうとする場合には、現象の自らに対する異質性をあえて全面的に肯定する所から始めなければならないだろう。当面の問題についても、バルトの思考に特有の、あるいはバルトのテクストの総体（corpus, corps）を特徴づけているあの「味わい」（savour）を害うことのないように、十分に留意しなければならない。ある意味ではあの「味わい」こそが彼の言説の特色なのであり、また彼ほどに「味わい」を重視し、それに敏感である人も少ないと考えられるからである。

これまでも多くの人々によって指摘されていることであるが、バルトは絶えることなく変身を繰返して来た。もつともその一生の中で自らの思考を変化させることはむ

しろ多くの思索者に共通のことであり、バルトの特有性として特記すべきことではないとも言えるだろう。しかしたとえばニーチェなどのように、その変化が極めて激しいだけでなく、むしろ思考の特質を形成しているような場合には、変化は一つの特有性と考えられるべきだろう。そしてバルトの場合にも、変化は、ある意味では方法化されて、その思考の特質を形成していると考えられる。彼は自分の言説 (discours)、あるいは自分についての言説が固定化し、紋切型 (stereotype) と化すことに、ほぼ本性的とも言うべき嫌悪感を抱いているようだ。たとえば、「真理は固さ (consistence) の中にある」とポーは言っている (『ユーレカ』)。だから固さに耐えられない人は、真理の倫理 (une éthique de la vérité) に対して自らを閉ざす。彼 (ロラン・バルト) は語や命題や観念が固まり、確実な (solide) 状態へ、紋切型 ^{ステレオタイプ} (stéréo は solide の意味だ) の状態へと移行する否や、それらを捨てるのだ⁽⁴⁾。バルトが通念や紋切型と、錯綜した——倒錯した——関係をしばしば結んでいるように見えるのも、結局はそれへの強い——否定的な——関心のしからしめるものにはかならないのだろう。練達した調理人さながらに、彼は、「言語が濃すぎ

て固まったり、焦げついたりしないように⁽⁵⁾」見張るのである。固定化と紋切型の否定は、こうして、少なくともある時期以降は、バルトにとってその言説活動の目的ないし原動力となっていると言えるようだ。

文学がそこに根拠を置かざるをえない一種のソシオレクト (socio-lecte) —— ある社会に特有の言語 —— としての「エクリチュール」(écriture) の検討を通して、在来⁽⁶⁾の文学が今日解体しつつあることを明らかにしようとした最初の著作 (『Le degré zéro de l'écriture', Editions du Seuil, Paris, 1953) に始まり、現代社会において全ての思考や表象を枠づけるものとしてのいわゆる神話への批判の企て (『Mythologies', Editions du Seuil, Paris, 1957) 、『そしてその企てのための方法的武器とも言うべき「記号学」(sémiologie) の提唱とその実践 (『Elements de sémiologie' dans 'Communication N°4', 1964, 'Système de la mode', Editions du Seuil, Paris, 1967) 、『いわゆる新批評 (nouvelle critique) の側に立ってなされた旧批評の批判』と、広義の構造主義に根ざした批評の実践 (『Sur Racine', Editions du Seuil, Paris, 1963; 'Essais critiques I', Editions du Seuil, Paris, 1964) 、『やむにはドクサ化し始めた

記号学への内在的批判を媒介とするテキスト論の企て
("S/Z", Editions du Seuil, Paris, 1970; "Plaisir du texte",
Editions du Seuil, Paris, 1973) としてエクリチュールな
いし文学の実践としての新たな記号学の企て ("Leçon",
Editions du Seuil, Paris, 1978) ……。たとえばこうした
著作の幾つかを通して示し出される彼の歩みそのものを、
全体的かつ統一に捉えようとしても、その企ては多く失
敗に終るか、あるいは無内容 (in abstracto) なものに留
まらざるをえない——なおバルト自身による自分の歩みの
要約が『ロラン・バルトによるロラン・バルト』(Roland
Barthes par Roland Barthes, Editions du Seuil, Paris,
1975) の中で試みられている⁽⁹⁾。

この歩みの中で、彼にとつて主要と思われるような用語
ないし概念が、大きな変化を示し、時にはその意味を逆転
させるといふ事態すら生じている。たとえば「エクリ
チュール」にしても、最初は一種のソシオレクトとして、
「言語」(langue) と「文体」(style) の中間にそのトポス
をもつものとして規定されていたのに対して、後には、一
切の外的なものとの関りを絶った言表の自由な戯れとして
捉えられているのである。あるいは「想像的」(imaginaire)

という語も、彼自身の語る所によれば、当初のバシユラール
(Gaston Bachelard) 的なものからラカン⁽⁷⁾ (Jacques
Lacan) 的なものへ移行している、といった工合だ——な
おバルト最後の著作『明るい部屋』(La Chambre claire,
Cahiers du cinéma-Gallimard-Editions du Seuil, Paris,
1980) においては、初期のサルトル的意味合いが復活し
ていると言えるかもしれない。彼にとつて最も主要な関心
事の一つである「記号学」がこの変身の何よりの証拠と言
うべきだろうが、六十年代前半のそれと七十年代後半のそ
れとは、もはや同一のものとしては論じられないほどの
差異を示しているのである。そして、自分の変化と関連の
ある著作者たちの名を、彼ほどに率直にあげた例は、他に
あまり類を見ないのではないか。しかもジッド、マルク
ス、ソシユール、デリダ、ラカン、ニーチェといった名前
の連なりから、思考の実体的な方位を現し出すことはほぼ
不可能なように考えられる。

にもかかわらず統一的なバルトの仕事の総体を想定する
ことは、決して不可能ではない——というより、見方によ
っては極めて強い統一性をもったものとして現れ出るこ
ともあるだろう。しかしその場合でもその統一の在り方

は、ごく特異なもののように思われる。彼の変化が、たとえば、思考の深化に基づくものであったり、対象領域の体系的要請に起因する移行・拡大に他ならないのであれば、あるいは方法論上の論理的要請に由来するものと捉えらるるのであれば、変化の背後に変わらざるものを見ることは、むしろ容易でさえあるだろう。しかし彼の変化はその何れでもない。おそらく統一の根拠は言説や言表 (énoncé) の内容ないしは「意味されるもの」(signifié)にあるのではなく、言表作用 (énonciation) そのものに、あるいは言表作用の在り方にあるのだろう。むしろその絶えざる変化そのものが、彼の場合の統一の根拠であると言すべきかもしれない。先に引いた彼自身の言葉から見ても、変化・変身は彼にとって最も根源的な戦略であったとも言えそうだ。残念ながらあまりにもあわただしく完結して終ったロラン・バルトの仕事の総体は——あるいはその突然の死によって不意に変化から取り出された総体は、結局は「エクリチュール」(その後期の意味での)の、あるいは「文学」(literature) (勿論バルトの意味での)の試みにほかならなかったと言うべきだろうが、「文学」とは、彼自らの規定によれば、「言語活動」(langage)による「言語活

動」の「ごまかし」(tricherie)にほかならず、「文学」の力とは結局は「言語」(langue)に対して加えられる「転位の仕事」(travail de déplacement)そのものであるとされているのだから、そのテクストの総体から統一的な内容、固定された「意味されるもの」を読みとり、しかもそれを第二次的な「言語活動」によって固定化し、紋切型化することほど、彼の「味わい」を害うことはないだろう。

『ロラン・バルトによるロラン・バルト』の中には、自分の肉体 (corps) についての非常に興味深い断片がある(「あばら」coquette)。気胸手術の際に切除された肋骨の一片を医師が記念にと呉れ、バルトはそれを他のガラクタと一緒に抽斗の中にしまっておいたのだが、ある日、抽斗を整理する際に、それをバルコンから外に投げすてた、というのだ。¹⁰自分の体から切り取った断片を投げすてること——自分のテクストの総体から断片を切り取り、投げすてて行くという作業。書くという行為を継続する過程で、否応なしに形作られて行く「資料体」(corpus, corps)を絶えず断片化し投げすてる——否定する——ことが、あるいは彼の変ることのない作業だったのだろうか。投げすてら

れた断片（あばら）を拾い集め、それを組み立てることに
よつて統一された資料体を再構成することも、確かに興味
のあることだろうが、そのようにして組み立てられたもの
が、どこかあの生物標本室のガラス戸棚の中の骸骨に似た
ものとなることは、避け難いことのように思われる。積木
遊びをする子供のように投げすてられた断片と戯れるの
が、おそらくはバルトに最も相応しいことなのだろう。不
断の否定と放棄こそが彼の本質なのだと呟きながら、断片
を積み重ねては崩し、崩しては積み重ねることこそ、バル
トのテクストを楽しむ（jouir）ことなのだろう。にもか
かわらずここでなされていること、そしてそれを含んでさ
らになされようとしていることは、あの人骨標本作りに似
たものとならざるをえないだろう。ただ、かりにその仕事
からある統一ある体が生じたとしても、それはこの仕事に
よつてのみ現れ出た、その時かぎりのものであり、持続的
であることも普遍妥当的であることも意図されていないこ
とは明らかである。

方法と化した絶えざる変身、おそらくそれと分ち難く結
びついているのが、これもまたほぼ本性的と言える学問の

「尊大さ」（arrogance）に対する嫌悪感ではないだろう
か。「彼（バルト）」は勝ち誇つた言説（discours de
victoire）が好きでない。……言説においては、論議の余
地のない正しさは、言語にとつての悪徳となる——つまり
尊大さ。私は三つの尊大さ、学問の、ドクサの、闘士
（militant）の尊大さに嫌な思いをもっている⁽¹⁾。通念ある
いは常識が尊大であり横柄であると言われることに、さし
たる問題はないだろう。信念に凝り固まつた闘士たちの言
説が、一切の批判を拒否する尊大さに満ちていることも、
確かなことだ。しかし何故学問の尊大さが語られるのか。
バルトによれば、学問が自らの言説の在り方や言表行為の
型を問題にする（mettre en question）ことがないから、つ
まり自分の言表行為に対する反省をいささかも伴わないか
らである。学問は真理の探究であり、学問的言表において
問題となるのは、語られ、意味された真理であり、語り
方、意味する仕方は二義的なものでしかないと考えるのが
普通なのだろう。そして真理は客観的な普遍妥当性を特質
とするのだから、真理を語りえている言表もまた客観的か
つ普遍妥当的だということになるのだろう。そしてそのよ
うな観点からすれば、真理ならざることをあたかも真理で

あるかの如く言いなし、かつそれによって相手を説得しようとする時にこそ、言表の仕方が問題となり、弁論術や修辞術に対する関心が生じる、というのだらう。しかしバルトは、今日あらゆる言表行為は、イデオロギーと無意識という、かつては知られていなかった力域（審級）（instances）のもとなされてゐることは明らかであり、したがっていかなる言表活動もこの二つの力域の作用を考慮することなしにはありえぬのだが、学問、特に人文科学（sciences humaines）はこの二つについてまったく無知である、と述べている。⁽¹²⁾人間を規定し制約するものとしてのイデオロギー——ここでは、ある社会に存在する観念や表象の総体として理解すべきだらう——と無意識の作用は、少なくとも現在においては——あるいはマルクスとフロイト以降は——否定し難い。この二つ——それは『零度のエクリチュール』における「言語」と「文体」に対応するものと思われる——は、個人に対しては所与としての、自然としての性質をもつために、人はそれとの関りを逃れることが出来ないのだし、かりにその超克を企てても、その企てそのものがそれからの方位規定を免れえないのだらう。⁽¹³⁾その制約があまりにも根源的であるために——「世界内存在」

（In der Welt Sein）ないし「状況内存在」（l'être-dans-la-situation）は人間の根本的な在り方であり、巨大な時間的長さをもつ個体の連鎖ないし組込み（Umordnung）の果てにのみ、ある個人の存在はそれとしてありうるのだから——、さらに真理の客観性と普遍妥当性が無条件的なものとして、絶対的なものとして信憑されているために、学者は自己の言表活動に対するその制約をまったく知ることなく、むしろ自らの客観性、無党派性、中立性さらには既存の全てのものからの自由を確信するのだらうか。相対の絶対化、信憑対象の実在化などが尊大さの特質であるのなら、それは単にある種の学問あるいは一部の学者に特有のものなのではなく、学問そのものの根本に根ざすものだと言わざるをえない。

しかしこの発言は、バルトにとって矛盾に満ちたものとなりはしないか。彼の経歴は、フランスにおける学者のそれとして最も輝かしいものと言ふべきだらう（ソルボンヌ出身、国立学術研究センター〈Centre Nationale de la Recherche Scientifique〉研究員、高等学術研究院（Ecole Pratique des Hautes Etudes）教授、コレージュ・ドゥ・フランス教授）。そして彼はコレージュ・ドゥ・フランスに

おける開講講義の中で、学問の領域で業績を残すことが長い間の望みだったと述べている⁽¹⁴⁾。もっともそのすぐ後で、これまではこの地位に相応しくない随筆めいたものしか書いて来なかった、とつけ加えてはいるが……。彼がその展開に大きく寄与した「記号学」が、それに対する評価は別として、人文科学の領域に新しい実証性と精密さをもたらしたことは否定出来ないだろうし、『記号学の要素』や『モードの体系』で代表される時期は、バルトとその著作が最も学問的であった時期でもある——もっとも彼はこの時期を後では「一寸した学問的熱狂」(un petit delire scientifique)と特徴づけているのだが……。より一般的に言つて、語ること、書くことの中には、自分の立場や思考の正当性への確信と、他者の説得が不可欠の要素として含まれているのではないか。「語ることは行動することだ」とかつてサルトルは書いていたが、行動とは、これもサルトル的に言うなら、自己の存在に相応しい周囲世界を形作ることにはかならないだろうから、そこには自己の他者に対する優位への確信が含まれるべきことになる。後でも觸れられるが、言語の基本型は直接法肯定形だと言われるが、肯定形を意味する「affirmatif」は「断定的」という

意味をもつと同時に、古い形では「直接法」そのものを意味する。あらゆる言語活動は、その基本的在り方においては断定的であると言うべきだろうか。断定的——語られ、書かれる事がらがそれ以外ではありえないこと、したがって、聞き読む人はそれを真実として受け取るべきだという要請がそこには含まれるだろう。バルトは、自分の書いた言説が両義的である、その在り方が目標をはみ出しているという不安、恐怖をつねに感じると言う。言説の目標は真理でないのに、その言説は断定的(casséti)⁽¹⁶⁾だからだ。日中書いたものについて、夜恐怖を覚えるというその恐怖もまた、先と同じものののだろうか。そして、「言語活動への恐怖」(La peur du langage)——「彼はしばしば自分の頭の中の、自分の仕事の中の、他人の中の言語活動を休ませたいと思う、まるで言語活動が人体のくたびれ果てた一部のように思われる。自分の言語活動が休んでくれれば、本当に安らぐだろうに……」⁽¹⁵⁾。言語活動の断定に恐れおのき、しかも人間として遂に言語活動から逃れられないとすれば、こう感じるしかないのだろうか。しかし問題なのは、このことを自覚しているかどうかなのではないか。日常の生活において、人は必ずしも自分の優位を確信

していない、むしろそれは願望であるはずだ。特別の権威に支えられていない人々は、お互いがこの願望の中に生きていることを諒解し合っている。そしてこの諒解の世界内では、直接法肯定形の断定性は最初から弱められている——多くのものによって制約された人間の個人的・主観的な言表であるという諒解が、日常的言語活動の大前提であり基本的枠組なのではないか。しかし学問的言説（という非日常的言語活動）は、始めからこの枠組の外にあり、あの断定性はいわばむき出しの状態にある。そしてそのことは、真理に関する（実際には相対的・主観的にすぎない）信憑や信念（*credo*）を絶対的・客観的なものと見なす学者にとつては、むしろまことに都合の良いことなのかもしれない。だとすれば彼は真理と言語活動の両者について無自覚的ということになり、その尊大さはだからほぼ本性的と言うべきことになるのだろう。

ソシュールの影響の下に、一時期密接な関係を結んでいた「言語学」と袂を分つに至った理由として、それが言語活動の学たろうとして学問的なタイプのメタ・ランガー・ジュ（*meta-language*）と、したがって「意味されるものの

世界」（*le monde du signifié*）と密接に関わっているという事実をバルトはあげているが、このことはかなり重要な意味をもつように思われる。というのも、人文科学の対象は、一般的に言つて、広義の「言語活動」ないしは「言表活動」と言うべきものだろうから、人文科学の全ては、多かれ少なかれメタ・ランガー・ジュにはかならないからである。言うまでもなくここで問題とされているのは、全てのメタ・ランガー・ジュではなく、「学問的なタイプ」（*type scientifique*）のものであるが、それはどのような特徴をもつのだろうか。「私は書く——これは第一度の言語活動だ。次に、私は私は書く」と書く——これは第二度だ」（*J'écris: c'est le premier degré du langage. Puis, j'écris que j'écris: c'est le second degré.*）⁽¹⁸⁾ある言表を対象とする第二度の言表は、対象としての（第一度の）言表を検討の対象とする——バルト的に言えばそれに嫌疑をかける（*porter la suspicion*）。一旦第二度の言表が作られれば、今度はそれを対象とする第三度の言表が作られ、さらにそれを対象とする……、こうして言表の度数は無限に増大して行き、そしてそのことは言表行為そのものが検討・嫌疑の対象となることを意味するだろう。だからメタ・ランガー・ジュは、

言語活動を無限の度数の戯れに誘いこみ、ある意味では言語活動そのものが絶対の根拠を欠くことを露わにする——絶対的なものによって根拠を与えられたものを嫌疑の対象とすることは不可能なのだから。しかし、「学問的なタイプ」のメタ・ランガージュは、この無限の度数の戯れを否定し、自らが位置する第二度に言語活動を固定しようとするのではない。第一度の言表、あるいは対象として任意に指定した言表に嫌疑をかけ、検討を加え、その正体を一義的に明らかにしながら——あるいは、そう自負しながら——、自分自身は他の言表作用の対象となることを拒否する——何故なら自らの言表活動によって真理が証されたから——、これがこのメタ・ランガージュの特色だろう。他に嫌疑をかける絶対の権利を確保しながら、被疑者たることを完全に拒否する、しかもそれは全て真理の名においてなされる、ここに人文科学における尊大さの根源があるのだろうか。いやある意味では、世界は統一的・法則的全体であり、その法則性は実証的・分析的方法によって確実に把握されるという確信を無条件の大前提として構築された（フッサールによって批判された意味での）⁽²⁰⁾近代的学問そのものが、尊大であると言われなければならないのかもし

れない。確かに、学問的言説（学術論文）における紋切型の表現のあるものは、言表の第二度への固定を意図したものと考えられなくもない——「周知のごとく……」、「この語以降の言表内容の真実性は万人の認める所であり、批判を許さない」、「言うまでもなく……」、「この語で導かれる事柄を筆者自身は言っているのだが、そのことの真理は他者が改めて言うまでもなく自明である」、「われわれは……」、以下に述べられることは、単に筆者個人の主観的見解なのではなく、筆者・読者をその中に包摂する研究者一般の客観的・普遍妥当の見解であり改めての検討の必要はない……など。勿論これらの表現は、まさに紋切型に墮しているそのことによって、今では先に示したような意味をすら失っていると言うべきかもしれないが、だとすればバルトの言う学問の尊大さとの関連を離れても、改めて考える必要はあるだろう——学問が真理の探究だとして、そのことは紋切型の表現とまったく無縁であるはずだから——。

かりにロラン・バルトの学問的实践について語るべきとするなら、それは先のような学問の尊大さを自分の言表活

動によって揺るがし、二度に固定した学問的言説を、あの度数の無限の戯れに誘うためのものだったと言うべきかもしれない。そのために彼は幾つもの戦術 (tactique) を編み出す。たとえば『批評と真理』(Critique et vérité, Editions du Seuil, Paris, 1966) に述べられている「作品の両義性」(l'ambiguïté de l'œuvre) も、⁽²¹⁾「文献学的法則とか、正当なる意味 (sens droit) を独り占めする大学の横暴 (tyrannie universitaire) に対する一寸とした武器」にはかならない——「彼の作品の動きは戦術的だ。征服することが大切なのではない、転位すること、人取り遊びにおけるように、相手の邪魔をすることが問題なのだ」。⁽²²⁾ところでバルトについて、その概念が曖昧であり用語が無規定的であるという批判が時になされることがある。一般的な学問の観点から見れば、このことは否定しえないようにも思われるが、バルトに則して考えれば、これもまた戦術の一つにはかならないようだ。あるインターヴューにおいて、自分の概念は一般に哲学者がそれに与えているような厳密さをまったくもっていない、そう率直に認めたバルトは、「概念ではありません。ただそれは隠喩として作用する概念——隠喩なのです。ニーチェの言葉が正しければ、彼が

言っているように概念が隠喩的な起源をもっているとすれば、私はまさにこの起源に身を置いていることになりま⁽²³⁾す」と語っている。インターヴューということもあり、ニーチェからの引用の出典は明らかにされていない。「学問的熱狂」の時期を中心とする幾つかの著作を除いて、バルトは引用出典に関する註記をあまり行わない。引用によって織りなされていないテキストはないという彼の基本的な考えに従つてのこととも思われるが、煩瑣な(必要以上の)出典の註記による客観性の標榜と出典の權威に基づく普遍妥当性の装い——という学術論文の紋切型——に対する「一寸した武器」だったのかもしれない。そして、バルトにとってニーチェは、「それについて語られる著者」ではなく「読まれる著者」の代表である。後者からは、「一種の音楽、思考の響き、アナグラムの様々な緻密さの戯れ」が与えられた、と彼は語る。⁽²⁴⁾とすれば引用出典の註記などは二義的なことなのだろう。「読んだばかりのニーチェで頭がいっぱいだった。でも欲しかったもの、手に入れたかったのは、観念Ⅱ文 (idees-phrases) の歌なのだった」。⁽²⁵⁾バルトが念頭に置いたのは、人間に根源的なものとしての隠喩形成衝動と、それから発散的に作られる概

念、根源から切り離され、普遍化され、色あせ冷え切った概念の納骨堂 (Kolumbarium der Begriffe) を、直観の墓場 (Begräbnisstätte der Anschauungen) をひたすら作りつづける学問について語られている、いわゆる『哲学者の書』 (Philosophenbuch) に含まれる「道徳外の意味における真理と虚偽について」⁽²⁶⁾ だったのかもしれないし、いわゆる「生の衛生学」 (Gesundheitslehre des Lebens) の提唱を行い、現代が所有する病める諸概念を揺るがす生の感情をもった青年について語った『反時代的考察』 (Unzeitgemäße Betrachtung) のある断片であったかもしれない。⁽²⁷⁾ しかしその詮索はここでは無用だろう。バルトにあの言葉を語らせた響きと調子をもつ「文」は、ニーチェの著作の到る所にあるとも言えるからだ。ここでは、ごく任意に、一八八〇年代のある断片を引用するに留める。「まず心象 (Bilder) ……ついで言葉、……最後に概念。概念——多くの心象を、何か直観されえない、むしろ聞きとりうるもの (言葉) のもとへ、総括する (zusammenfassen) はたらしき。『言葉』において、つまりそれらをあらわす言葉が一つだけあるようないくつかの類似した心象の直観において生ずるささやかな一寸した情緒——このか

すかな情緒が、共通のもの (das Gemeinsame) であり、概念の基礎なのである」⁽²⁸⁾。バルトの場合にも、概念は心象を喚起する作用において捉えられていると言えるだろう。

そこには論理的理解力とともに直観と感受性が要請されているのである。だからバルトにとっては、語を一定の文脈内に挿入することは、それを一つの明確な意味に規定するというよりは、むしろそれが潜在的にもつ複数の意味を顕在化する企てだとすら考えられるのだろう。

バルトの愛好する「両義的語法」 (amphibologie) は、このことに関連する一つの戦術だと思われる。「……一般的には、文脈は二つの意味のうち一つを選び、他を忘却することを強いる。こうした両義的な語の一つと出会うたびに、R・Bは逆にその語に二つの意味を残しておく、まるで一つの意味が他の意味に目くばせをし、この目くばせの中に意味がある、とでもいうように。そしてこの目くばせが、同じ一つの語に、同じ文の中で、同じ時に、異なった二つのことを意味させるのだし、この二つを意味論的に楽しませるのだ」⁽²⁹⁾。用語や概念の明確な規定性を要求される (と一般的には言われる) 学問的言説に、こうした両義的語法は相応しくない、それは美的ないし文学的言説に

特有の語法の一つなのだろう。同様のことは、語源 (étymologie) についての彼の強い関心についても言えると思われる。もともと語源といっても、彼が惹かれるのは「真理あるいは起源」のではなく、通用している意味と語源的な意味の重なり合いから生れる「二重写しの効果」(l'effet de surimpression) なのである——「彼の言説は、いわば彼が根こそぎ切つて来た語に満ちている」⁽³⁰⁾。

バルトはここにあげた以外のさらに多くの同様の技法について語っているのだが、結局これらの技法の全ては、

「われわれの言表の自惚と学問の尊大さを崩壊させるための、戦術的な理由」⁽³¹⁾のために用いられる。しかし何故に彼は戦術 (tactique) ⁽³²⁾ についてのみ語り、戦略 (stratégie) には觸れないのだろうか。彼のその時々「戦い」は、本来最終的には近代的な学問の全面的批判、いや否定を目標 (戦略的目標) としているはずである。しかし彼自身はこの全面戦争に勝つことなど信じていないし、というよりそれにまきこまれることを拒否しているとさえ思われる。戦いの全体の在り方を考えず、戦略的見通しもたず、しかしその時々戦闘には戦術をめぐらしながら参加し、しかもそれを楽しむというわけだ——あるいは戦略はマルク

ス、フロイト、ニーチェなどにまかせているというのだろうか。公けの、大義の戦いというよりはむしろ私的な戦い。あの全面戦争に身を投ずるには、彼は余りにも自己愛的であり、論理的・知的であり、近代的いやむしろ古典的なかもしれない。「私は私が擁護するテクスト理論よりずっと古典的だ」⁽³³⁾。これに類する言葉を彼は繰返し語っている。そしてそれは確かに最も特徴的な彼の「味わい」の一つである。

近代的な学問に対する、あるいはその尊大さや思い上りに対する批判は、決してロラン・バルトに特有のものではない。むしろそれは現代の学問的・思想的状況を規定する最も基本的な要因の一つに数えられるだろうし、その批判の徹底という点では、到底ニーチェその他に比肩しうるものではないだろう。確かにそれはバルトにおいてほぼ本性化していると言えるにせよ、他からの、特にニーチェからの影響は明らかである。「ニーチェからの影響は想像以上に大きいのだろう。ロラン・バルト論を企てるのなら、この点に留意する必要がある。ところで『ロラン・バルトによるロラン・バルト』のあの図表の中で、彼はその時々

自分のテキストと相互的関連にあるテキスト (l'inter-textuel) の著者名をあげているが、最初のジッドと最後のニーチェは、何故かカッコに入れられている。あるいは他の場合のような明確な (具体的) 関連にはない、ことを単に意味しているだけなのかもしれない。あるいは……。

「これまで彼は次から次へある巨大な体系の後見のもとに仕事をして来た (マルクス、サルトル、ブレヒト、記号学、テキスト [texte]。今日、彼は以前よりも身を露わにして [あけすけに a découvrir] 書いているように見える」⁽³⁴⁾。あのリストは、いわば後見役のリストなのだろうか。「過去の言語活動の織りなした幾つかの断片を除けば (というの) も語るためには矢張り他のテキストを支えにしなければならぬ (から)、彼を支えるものは何もない」⁽³⁵⁾。その時々の後見役から離れ、支えなしに語ろうとする時に、定かにそれと指摘し難いにしろなおその語りを支えている響き、あるいは調べ (基調)、ジッドとニーチェをそのようなものと捉える理由が、バルトのテキストの中にまったくないわけではないだろう。」おそらくバルトに特有のものは、そうした批判そのものではなく、尊大さを揺るがすための戦術の探究であり、より重要なのは、自分の言説、言

表から可能なかぎり尊大さを消去するための多様な企てではないだろうか。「文筆家 (écrivain) とは、自分の思考や情念あるいは想像を文 (phrases) によって表明する人なのではなく、文について考える人、つまり思想家 (Pense-Phrase) (ということ) は、完全に思索者 (Penseur) (でもなく、完全に美文家 (un phraseur) (でもない人) なのだ」⁽³⁶⁾と彼は述べているが、彼自身もその意味での思想家なのだろう。「純粹な統辞法への夢、不純で、異 [雑] 種言語的 (hétérologique) な (語の起源と専門化された意味を混ぜ合わせる) 語彙の快び」⁽³⁷⁾、そう自分を規定出来るのではと彼は言う。両義的語法その他の多用にもかかわらず、バルトの文章は確かに明快であり平明である。その平明さゆえにあの異 [雑] 種言語性が際立つとも言えるが、逆にそれが、性急な読者に、一義的な読解でよしとさせていることも否めない。いずれにしても他の多くの前衛的思索者のテキストが、用語法と統辞法のいずれの面においてもある捉え難さを持ち、それが逆の意味で尊大さを匂わせることがなくもない——前衛的闘士たち——のに対し、バルトの文の平明・透明は、特筆すべきことのように思われる。

先にあげた「戦略なや戦術」(tactique sans stratégie)という戦略に、上述のことは基づいているのだろうか。少なくともニーチェ以降、ヨーロッパ思想にとつては、根源的な原理に基礎を置いた二元的対立の超克が、最大の戦略目標となつていると言えるだろうが、バルトは根源的原理の否定を通して一挙に対立を超克する戦いには加わっていない——勿論多大の共感を覚えてはいるのだが……。むしろ彼は対立する二つに同時に身を置こうとする。それもまた対立の解消——だが多分に主観的な——なのだろう。それはおそらく、(対立する二者の間の)深淵の上を綱渡りする、あるいはそのまっただ中に自らを宙吊りにする軽業師にたとえられるべき企てだろう。危険な、軽やかです早い身のこなしを必要とする賭け——そして軽やかさとする早さはバルトの特質でもある。そして危険な賭けのもたらす緊張が、彼の文章を、平明ではあるが平俗ではないものにしていと思われる。危険な——それ故にまた強い快楽をもたらすだろう宙吊り。というより、この強い快楽にひかれて、彼はあえて二つの何れにも身を置かず、あの危険な戯れを戯れているとすら言えそうだ——むしろ一種倒錯的な悦楽。彼のテキストは、その点でも、私的で、詩的で、

美的 (esthétique) な「味わい」を濃厚にもっている。その「味わい」を保ったまま、美学的思考を読み取ろうとすること、それを一義的に規定された学説——「意味されるもの」——のレヴェルに固定することなく、しかもそれについての言説をも第二度に固定することなく、彼(のテキスト)について単に私的ではない論理的な言説を作り出すこと、いったいそれは「バルト自身による」以外に可能なことなのだろうか。

言語(活動)は、ロラン・バルトにとって最も根本的な問題であり、全てはここに帰結するとも言えるのだが、その言語観はかなり特徴的なものでもある。彼の全資料体のもつ「味わい」は、最終的には彼の言語観とそれに基づいた実践によつて規定されているだろうから、このテキストにとつてもその検討は不可避のものであるはずだが、さし当つては学問的言説と関る範囲に限定して、一つ二つ断片を拾い集めてみるしかない。固定化、通念、權威、抑圧、群居 (grégaire, grégarité) ……に対する拒否感が、バルトにおいては本性と化していることは、すでに明らかだと思ふ。当然のこととして「権力」(pouvoir)は、ある意味

では、これら全てに関するものとして、彼の最も忌避するものだろうが、しかし「権力」はいかなる時代、いかなる社会にも存在するだろう。一つの権力の打破が、また別の権力の誕生を意味するものではないこと、権力の保持者はむしろ絶えざる変化を特質とするかもしれないが、権力そのものは絶えることがないこと、権力は単に政治の領域だけではなく、社会のあらゆる領域に存在すること、それはいかようにしても否定しえない事実である。そのことは、バルトによれば、権力が社会を超えた (transsocial) 組織への寄生物であることに由来するのだが、この「社会を超えた」組織が、ほかならぬ「言語活動」⁽³⁸⁾、特にその法則としての「言語」(langue) にはかならない。「言語」が「社会を超えた組織」と言われる理由は明らかだが、それと権力の関係、寄生関係はどのようなものと考えられているのか。

「言語活動は立法〔活動〕(legislation)であり、言語はその法典(code)である。言語の中にある権力に一般に気づかずにいるのは、全ての言語が分類(クラス分け)(classement)であり、全ての分類が抑圧的(oppressif)であることを忘れているからにはかならない。〈ordo〉は分

類でありかつおどかしである (répartition et commination)。ヤコブソンが示しているように、イデオレクト (idiolecte) (私的言語) は、それが語ることを許すものによつてではなく、むしろ語ることを強いる (obliger à dire) ものによつて規定される」⁽³⁹⁾。確かに一つの「言語」(国語)で語ることは、その〈ordo〉(秩序・命令)に全面的に服することにはかならない。個別的な言いまわしや言表のレヴェルではなく、「言語」のレヴェルで考えるなら、それは一切の自由を許容しない。「言語」の抑圧について語るバルトも明らかにその抑圧下にあるのだし、たとえば国語の乱れを非難する世代も非難される世代も、それぞれのイデオレクトの法則によつて制約されると同時に、同一の国語の抑圧下にあることは間違いない。言葉づかい、仮名づかい、正書法など、場合によつては二重に抑圧的となりうる。それは時に歴史的ないし社会的に規定された「言語活動」——あるいは一種のソシオレクト——を普遍化し、他のソシオレクト集団に強制するものとなるからである。「その構造そのものによつて言語は宿命的な疎外関係を自らのうちに持っている。語ること、さらに論じること (discourir) は、しばしば繰返されているように、伝達す

る) (communiquer) ではなく、服従させること (assujettir) である。全ての言語は全面的な制辞法 (réction)⁽⁴⁰⁾ である」。⁽⁴⁰⁾ あるいは、「あらゆる言語活動の遂行態 (performance) としての言語は、反動的でも進歩的でもない。それは単にファシズム的である。というのもファシズムは言うことを禁じるのではなく、言うことを強制するものだからである」。⁽⁴¹⁾ 勿論ここで言われるファシズムを、ただちに特定の政治権力と結びつけて考える必要はない。しかしファシズムが言語のファシズム的性質を強調しつつ利用し、抑圧の手段としたことも事実である。多民族国家における一国語の強制、一国語国家における多民族性の否定、あるいは一方言による多方言の抑圧などが、単に言語に外的な政治的権力にのみ基づくものではなく、一面で言語そのものの特質にも起因することは、十分に考慮する必要があるのではないだろうか。ところで以下に略述するバルトの論議は、さらに言語そのものに即したものと考えられ、より重要な意義をもつだろう。語り手や書き手の主観的な意図の如何にかかわらず、言語は断言 (assertion) による権威と繰返しによる群居性 (gégarité) との二つの特質をつねに伴っている。言語は基本的には断定的なの

であって、否定、疑問、可能、判断の留保などには、幾つかの特別の演算子 (opérateurs) が必要なのであり、それらが言語にある種の装い (仮面 masques) を与えるのである。一方言語を構成している諸々の記号は、再認識されるかぎりにおいて、つまり繰返されるかぎりにおいて、それとして存在しうる。だから記号は追従的 (suivistes) であり群居的である。⁽⁴²⁾ 言語の基本が断定的であることは、先にも語られた。確かに語ないし文の基本形に対し、多様な変化語尾や語がつけ加わることによって初めて断定はやわげられ、言表は多様な趣きを呈することになるのだろう。純粹に言語学的な観点からみてのこの論旨の当否については、ここで論議する必要はないだろう。少なくとも断言と強制——少なくとも要請——が一つの特質として言語に内在することを確認することで足りる。限定された数の記号の反復的使用、確かに限定性と反復性は記号の不可欠の条件である。造語の自由は、言語学的には周知的なものに限定されるのだから——その場合でも語を構成する単位 (音素) の形成の自由はゼロである——⁽⁴³⁾、いかなる場合でも言語活動は限定された所与としての記号に依らざるをえないのだし、所与としての記号群——言語——は、明らかに反

復的使用の結果堆積したものにはかならない。記号は反復的出現を停止した時にこの堆積から消滅せざるをえない——死語。「各記号の中には、あの紋切型という怪物が眠っている」⁽⁴⁴⁾。こうして言表を開始するとともに、人は断定と強制によって容易に権力的となるのだし、しかし同時に群居性と追従性によって自由を失い、紋切型に墮す危険にさらされる。言表者は主人であると同時に奴隷となる——所与としての記号を絶対的法則の支配下に反復使用し、しかしそのことによって言表内容を断定し、強要することになるのだろう。奴隷たることを覆い隠して——あるいは知らずに——権力のみを行使すること、あの尊大さはこのようにも捉えられるのだろうか。

語り、書くことによって、いかなる人も権力としての言語に仕えざるをえない——紋切型を回避する企てすらこの力の抑圧下で行われるだろう。そしてそれはおそらくもう一つの紋切型に墮すことではない。むしろ意図的に紋切型を避けようとして墮ちこむ紋切型の方が、しばしばより紋切型的でさえある。語り、書くことにより、いかなる人も何らかの形で他者を自らの言語活動の権力の支配下に置こうとするだろう。演算子による仮面も、結局は支配のた

めの政策にはかならないと考えることが出来る——巧妙な権力者が、むき出しの権力による支配をむしろ覆い隠すように……。権力による抑圧が自由の否定であることは勿論だが、他者を自己の支配下に置くことにも真の自由はないだろうから、もし自由を求めるとすれば、「自由は言語活動の外にしかない」⁽⁴⁵⁾。これは、ある意味では、極めてラディカルな言語観と言うべきではないだろうか。言語が、絶対的ロゴスとの関連において、人間の根源とされる場合は言うまでもなく、言語が一種の社会的制度として分析の対象とされる場合においてすら、本質的な抑圧・権力として捉えられたことはなかったのではないだろうか。というより、超越的理念との訣別を果し、自由と個性を特質とする近代的人間観が成立した時、言語は普遍的人間性——人間化された理念——とともに、なお人類に統一性と全体性を付与すべき根拠と考えられていたのではなかったか。あるいは言語は、まさに人間化したロゴスとして、普遍的人間性そのものだったと言うべきかもしれない。言語の抑圧的性質は、人間中心の近代的世界において最も良く覆い隠されていたのだろうか。言語の権力的使用はありえても、それは人間および言語の本質に反することなのだ、そ

れがむしろ一般的な理解だったのではないか。そして言語の研究、特に言語的財としての古典的文獻の嚴密かつ客觀的な検討を通してこそ——それによってのみ——、人間およびその文化の全体的な把握が行われるのだという文獻學への信憑——それはやがてニーチェによって徹底的に批判されることになるのだが——も、結局は先のような言語觀から生じたものだろう。そして近代的な學もまたこのような人間觀、言語觀と深く關つてゐる——というより分ち難く結びついてゐると言うべきだろう。確かに近代的な學の体系（領域性）は、人間に内在化したロゴスをその原理としてつものだし、一切の偏見からの自由とそれに基づく客觀性・普遍妥当性への要請は、まさに言語の本来性の實現によって成就されるべきものであつた。その言語が本質上権力的とされたのである。

確かに「自由は言語活動の外にしかない」のだが、しかし「不幸なことに、人間の言語活動（*langage humaine*）には外がない（*sans extérieur*）」⁽⁴⁶⁾のである。何故なら、「主体（*sujet*）」はその言語活動によってのみ構成される⁽⁴⁷⁾からであり、「主体はその言語活動の結果にはかならない⁽⁴⁸⁾」からである。そこで言語と人間の關係は極めて錯綜

した、むしろ倒錯的なものとなる。人間は人間である限り言語活動の外に出ることは出來ず、その意味では言語活動内存在（*être-dans-le-langage*）とでも言うべきものだろう。一方人間は自由を本質とするものと考えられており——この点に関する（哲學的）論議は、バルトにおいては、さほど活発には行われていないようだが、ある意味でサルトル的なこの人間把握が彼の場合前提となつてゐるのだらう——、当然抑圧的である言語活動の外へ出ることをその根源的な企てとしてもたなければならぬ。人間的であるために人は言語の外に出ることを企てなければならぬが、この企てそのものは明らかに彼の自由においてなされるだらう。自由に基づく企て（*投企 projet*）の目的は自由にはかならないのだが、しかしその自由は人間が人間——言語活動——を超えることによつてしか到達しえない。自由の目的としての自由、企ての實現の不可能性、これは、ある意味では極めてサルトル的な状況である。対自存在たる人間の不斷の投企の対象は、当然人間に欠如したもの、即ち充溢した即自存在でなければならぬだらう、つまり投企の目的は「即自と対自の綜合・統一」⁽⁴⁹⁾にはかならないのだが、その統一体はほかならぬ神なのである。サルトル

の場合、自由による自由を求めているの不断の投企は、こうして神たろうとするありうべからざる企てにほかならず、人間は「無益な受難（情念 passion）⁽⁵⁰⁾」であるとされているのである。バルトの場合にも、人間は「無益な受難^(passion)」なのだろうか。この問に対する具体的な答をバルトのテキストの中に求めることは難しいだろうが、あるいはそうなのかもしれない、人間は「無益な情念^(passion)」、「実を結ぶことのない情熱^(passion)」、つまり「倒錯的存在」という意味において……。しかしバルトはこうしたサルトルの問題状況の中に入り込み、それに捕えられることを、巧みに、軽やかに避けようとする。結局はサルトルも解決しえなかった出口なしの状況を、彼は軽業師的にすり抜けたと言った方が良いのかもしれない。言語を外から見ると言っただけで、言語の権力に捕われずしかも言語によって他を抑圧しないためには、彼の言うようにキルケゴール的な信仰の騎士カニチエ的な超人になるしかないだろうが、それが不可能だとすれば、言語を誤魔化し、言語に空をつかませるしかない。そしてこの言語の誤魔化しが文学にはかならない。⁽⁵¹⁾言語活動の内部にあつて言語活動を消耗させ、ふと言語の表面を露出させること——テキストは言語の露頭であり、言語活動

に属しながら言語活動の外にありうる唯一のものであると言われる。⁽⁵²⁾文学とテキストはここでまったく同一視される。もし学問的言説からあの尊大さを追放すべきだとすれば、それもまた文学、テキストにならざるをえないことになるだろう。

〔誤魔化し、それは自由と権力の一方を他方によって否定することでもなく（その不可能性はすでに示された）、また対立の根源を説明することでもなく（それはあの出口なしの状況への全面的参加を余儀なくするだろう）、この二つに同時に身を置き、二者の間の深淵の上で軽業を演じることなのだろう。崩れやすい一点で辛うじて保たれる平衡としてそれを捉えるなら、その点に関するかぎり、バルトは古典的である。誤魔化し、一つには言語に空をつかませ、その支配から逃れること。ある意味で言語活動において最も制約的であるのは、「意味するもの」と「意味されるもの」という二項間の関係だろう——人間に根拠をもちながら人間に対して制約的に作用する慣習的・制度的関係（ソシュールの意味での「言語」）。その制約を逃れることは、「意味されるもの」の出現を無限に遅延させること、

統辞法の純粹な法則に従つた語の連なりを「意味するもの」の純粹な戯れの場に転ずること——エクリチュール。文学、テキスト、エクリチュール、この間にすでに差異はない。エクリチュール——そこでは制約を脱した自由な戯れが演じられるとともに、言語の物質性とその法則性は確としたものとしてある——言語の表面、露頭。エクリチュール——書かれたもの、文字、「意味されるもの」から切り離され、反復と群居から取り出され、孤立させられた文字、エルテ(Erte)の文字。⁽⁵³⁾あるいはトゥウォンブリ(Cy Twombly)の絵画への関心。⁽⁵⁴⁾確かに、絵画は、かりに記号だとしても、権力性を相対的に欠いた記号だと思われる。そこでは、ディノーションのレヴェルにおける二項関係は、現象的にはほぼ消滅する——二項の関係は類同的(analogique)なのだから。絵画において意味作用が語られるとすれば、それはコノーションのレヴェルにおけるそれであろう。それは始めからずれた、斜の(schépé)ものと言うことも出来る。にもかかわらずその表面性は極めて明確だ。そして、写真に対する関心。⁽⁵⁵⁾ディノーションのレヴェルにおける二項の関係はそこでは「同義語反復的」(tautologique)であり、その意味でむき

出し、コノーションと言えるかもしれない。記号としての制約はそこで最も小さくなるのだろうか。写真と比較した際の、映画に対する抵抗感——映画の「意味するもの」は「切れ目がなく」(lisse)、映像が連続的に続いて行き(suit)、言語と同様に意味の受容を強いると考えられるからだ。⁽⁵⁷⁾言語や記号を否定するのではなく、誤魔化すこと。

記号の法則は人為的なものであるが、それが自然に根拠をもつかのごとく装う時に、当然のものであることを主張する時に、抑圧は強度のものとなるだろう。ところで「記号の支配する国」日本においては、記号の法則は極めて精緻であり強固であるため、改めて自然らしさを装う必要はなく、しかも最終的な「意味されるもの」としての超越的実体によつて根拠づけられてもいない。⁽⁵⁹⁾日本において記号は法則的であるままに自由に戯れていると考えられたのだろう(超越的実体の不在こそが戯れなのだから)。日本を一つのユートピアと見たこと、日本との接觸が後期のバルトの思考の展開に大きくあずかっていること、このことから逆にバルトのある「味わい」を味わうことは十分に可能だろう。しかしこれら全てのことは、ここでは省略され

る。]

ロラン・バルトはその没時、コレージュ・ドゥ・フランスの教授であった。彼はこの（フランスの学問〔学校〕制度の中で最もエリートの言われる）学校において、文学の記号学（*semiotique litteraire*）の講座を担当していたが、その開講講義において、今日多くの雑誌、学会（*associations*）、大学、研究所において、記号学は記号に関する実証的（肯定的）な学（*science positive*）として研究され、樹立されているが、自分の記号学は否定的かつ能動的（*negative et active*）なものであると規定し、そのような記号学者は芸術家なのだと述べている。⁽⁶⁰⁾そしてさらに次のように続ける。記号学は当初そう考えられていたように、言語活動についての言語活動、つまりメタ・ランガージュなのではない。ある言語が他の言語の外にあるという関係は、結局は保持されえないからである。記号について記号で語るとき、二種類の記号は奇妙に合致して戯れ合い、演じるものと演じられるもの（語るものと語られるもの）が混り合うのである。しかしメタ・ランガージュでないということは、記号学が学問でないことを意味するのではない。

い。今日、学問とメタ・ランガージュの合致は崩れつつある。記号学はこの（新たな）学問（*science*）——領域的に固定した自律的な学（*discipline*）ではなく——とはある関係を保つ。記号学は学問に対してはそれを助け、一時期その道づれになり、操作上の手順（*protocole opératoire*）を提供することは出来るだろう。記号学はいわば今日の知におけるジョーカー（*joker du savoir d'aujourd'hui*）にはかならない。⁽⁶¹⁾

確かに度数の戯れを拒否し、第二度から自らを固定する尊大さをもつのでないかぎり、客観的かつ実証的であるメタ・ランガージュとしての記号学は不可能と言うべきである——あるいはバルトは尊大化した（ドクサ化した）ある種の記号学をここで批判しているのだろう。そして学問の在り方が決して不変のものではなく、歴史的に変化するものであることは、特に人文科学の領域において明らかではないか——バルトは神学を例にそのことを語っている。今日多くの大学や学会の制度上の基本となっている学問の体系（領域）も、ヨーロッパ近代にその場をもつ歴史的なものでしかない。学問とメタ・ランガージュの合致も、明らかに近代的な学問の在り方と言語観に由来するものであつ

た。ニーチェに端を発しバルトにまで到る学問批判と新たな学問への企てによって、今日の学問はようやく変化を示し始めたのだろうか。そのような学問と文学としての記号学は道づれになることが出来るのだろうか。しかしバルトは自らの記号学を「今日の知におけるジョーカー」と規定していた。学問全体の中にあつて、それはなお正規の位置ではなく、常に番外の位置にあるのであり——正規軍に対するゲリラ的位置にあるのであり——、思いがけぬ役を演じる道化であり、「意味するもの」の戯れ（ジョーク）を戯れる余計者なのだろう。とはいえ正規の学問も全面的に否定されてはいない。それは道づれの相手であり、様々な「操作上の手順」を、戦術を提供する対象ではある。道を共にし、手順を提供することによって、そう明確には表明はしないにしろ、正規の学問の変化が促進されることを幾分かは期待していたのだろうか。それは、フランスのいわば最高学府の教授に就任するに当つての、正規の（制度的）学問ないし学問的制度へのオマージュであつたのかもしれないが——とすればそれはいかにもバルトらしいオマージュだ——自らの記号学と正規の学問（学問的制度）という相対立する二者に同時に身を置き、例の宙吊りの戯

れを演じるという意図のひそかな表明でもあつたのかもしれない。

かりにバルトのテキストの総体を学問的なものとして捉えるにしても、それは文学としての、テキストとしての、エクリチュールとしての学問でなければならぬ。そのような学問について語ろうとする場合、それ自身が文学、テクスト、エクリチュールとならざるをえないのだろうか。

このような学問とある時期道づれになろうとする場合、少なくともあの学問の尊大さを捨て去り、二度に固定されたメタ・ランガージュの段階を脱していることが不可欠の条件となるのだろうか。この道づれとともにある道のりを歩む間に、思いがけない切札をつきつけられ、自らを大きく変化させることのありうることを、予め覚悟して置くべきなのだろうか。

ロラン・バルトの資料体の「味わい」と深く関わる幾つかの「戦術」については、先に略述されたが、そこで言い残された、しかも極めて重要と思われるものがある。彼が断片（fragment）という形式、あるいはむしろ断片化（fragmentation）という方法を好んだことは、それについ

て書かれた文章を通して(62)も知ることが出来るが、何よりもまずその何冊かの書物によって明らかとなるだろう。特に『記号の支配する国』(L'empire des signes, Skira, Genève, 1970)などに始まり、『テクストの快楽』(Le plaisir du texte, Editions du Seuil, Paris, 1973)、『ロラン・バルトによるロラン・バルト』、『愛の言説の断片』(Fragments d'un discours amoureux, Editions du Seuil, Paris, 1977)、『明るい部屋』に到る、後期の著作においてそれは顕在化する。彼にとつて断片化は、言語内の権力の裏をかき、権力に空を掴ませるための手段にほかならない。(63)それはまた、語られたものに最終的な意味を付与するという構想のもとに書かれたものを、先立つ数世紀におけるレトリックの法則をうちこわすための技法であり、断片はアナキー(anarchie 命令しないこと)なエクリチュールと言われる(64)。断片は、だから論文(dissertation)などともつとも対立するものだろう。論文における、問題の提起、展開そして結論という各部分は、その間に断絶や飛躍はあるべきでなく、全ては論理的法則に従つて必然的に関連づけられていなければならない。こうした論文あるいはドクサ的言説は、バルトの言う〈le nappé〉(65)——テーブル・クロスで

覆われたように、差異を隠し、平坦で連続的なもの——にほかならず、全ては法則の制約下に展開し、法則に基づいて予測することが出来る。断片化はこのような連続に裂け目や断層を作り出し、法則やドクサに基づいた予見を不可能なものとし、装われた自然らしさを消滅させるものと言ふべきだろう。だとすれば、断片の配列も、それら相互の關係が何らかの「意味されるもの」に向けた指示機能を帯びたり、あるいはそれらの關係からある構造が生じ、その結果言表全体が連続性や統一性を獲得し、ある明確な主題が現れ出たりすることのないように、配慮されなければならない。彼が時に断片に名称をつけ、それをアルファベツト順に並べたりするのも、確かにそのための方策なのだろう。(66) 学問全体の体系と学者個人の体系の中に明確に位置づけられ、それからの要請に基づいて書かれる学問的著作に要請されるスタイル——それはしばしばあの〈nappé〉に近づくだろう——と対極的な位置にあるのが断片というスタイルだろう。おそらくそれは、断片的な思考の結果なのではなく、連続的・統一的思考の強靱な意志に基づいた断片化の結果なのだろう。勿論断片、断片化もバルトに特有のものではない。〈aphorisme〉〈maxime〉〈pensées〉

〈cassa〉など断片形式は——特にフランスに——古くから存在するし、又もやニーチェを引合に出すことも出来るだろう。バルトの場合、その独自の言語観に基づいて、基本的な戦術として極めて明確に意識化され、方法化されている点に、その独自性を認めることが出来るように思われる。書くことにおける断片(化)は、語ることににおける「脱線」(digression)あるいは「余談」(遠出 excursion)に対応する。言語の権力を問題にした開講講義が、権力に捕えられることなく、そして権力化することもなしに、言語の権力を論ずるための言説の形式の探究としての性質をもつと言われているのも、当然と言うべきだろう。⁽⁶⁷⁾

隠喩Ⅱ概念、両義的語法、語源、断片(化)、脱線、余談……、これらは、典型的には、後期の著作に見られるものだが、彼自身断片について述べているように、⁽⁶⁸⁾全ての時期にわたってその言説を特徴づけ、その資料体の「味わい」を作り上げているものと言えよう。だからそれらは、その仕事の総体が示し出す基本的問題と不可分に結びついたものなのだろう。というより、その基本問題、あるいはその問題圏は、これらの技法Ⅱ戦術、それによって特徴づ

けられる言説の在り方、そしてあの「味わい」を通して、推論され、直観され、感じ取られるしかないと思われる。近代的な知(学問)と言語観の批判と超克、しかしそれはロラン・バルトの場合、その思想内容として、「意味されるもの」のレヴェルにおいてのみ理解されるべきではないだろう——思想内容としてだけなら、その批判と超克は決して彼に特有のものではないし、その内容の広がりや深さも、たとえばニーチェあるいはサルトルなど彼とのテクスト連関の中にある先行の思索者に比較した場合、むしろ劣っているとされるかもしれない。おそらく彼は、その批判・超克を、まさにそのエクリチュールの、テクストの実践として、つまりは「意味するもの」のレヴェルにおいて行おうとしたのだろう。その仕事は「深さ」を欠如するのはだから当然のことであつた。思想的・学問的な言説から「深さ」を欠落させること、それこそが、彼の全戦術を方位づける戦略だったとも考えられる。しかしこの戦略は、勝ち負けとは関係をもたない。戦うのは勿論バルトだが、戦いの相手は自分の言説だからだ。彼はつねに勝ち、つねに負ける。むしろ限りなく勝ち負けを交替させて行くところに——子供の遊びにも似た——悦びがあるのだから

う。しかしある意味で彼の戦い＝戯れは極めてラディカル

であり、前衛的である。「意味されるもの」のレヴェルで前衛的であり「意味するもの」のレヴェルにおいて正統的であるということは、事がらの性質から言ってありうべからざることであるが、「意味するもの」のレヴェルにおいて——そこにおいてのみ——前衛的であるということは、それによって「意味されるもの」の出現を無限に遅延させることが可能である以上、全面的に前衛的であることを意味する。見かけ上、前衛的だということは、彼の場合、真に前衛的だということにはかならない。確かに、彼自身述べているように、言語という権力との戦いにおいて彼はつねに「左翼というより極左」(Je suis plus gauchiste qu'à gauche)であった。

「一つのドクサが提示され、それが耐え難いものになる。それから逃れるために、パラドクサを要請する。ところがこのパラドクサが付着物で汚され、それ自身が新しい凝固物、ドクサになる。こうしてもっと新しいパラドクサをさらに求めざるをえなくなる……」(70) ロラン・バルトの営みは、結局はこの果てしないドクサ＝パラドクサという転

位の企てにほかならなかった。

『ロラン・バルトによるロラン・バルト』という書物。ところでここでの二つ(二人?)の「ロラン・バルト」の間には、どのような関係が存在するのだろうか。この二者がまったく同一の存在だとすれば、その二者が、動作主体と動作対象という異質の——というより対立的な——存在の仕方を同時にするということはありえないはずだ。二者がまったく相異なつた存在であるとしたら、何故に同一の名詞がそれに冠せられているのだろうか——同一の固有名詞が異なつた二つの対象を同時に指示することはありえないはずだ。あるいは人格的存在の自己同一性(identité)と言語の統一性がすでに崩壊していることを暴くための「一寸した武器」なのだろうか。もつとも存在ではなく意識の問題に限るなら、その予盾ないし分裂は、ある意味では常識化したことでもあるのだが……。この本は、「永遠の作家」叢書(Ecrivains de toujours, Editions du Seuil)の九十六冊目に当る。この叢書は、ある著者が、ある作家について、主にその作家のテクストを基にして述べるというスタイルをとっている。たとえばその二十九冊目は、フラ

ンシス・ジャンソンによる『彼自身によるサルトル』(Francis Jeanson: Sartre par lui-même, Paris, 1961)だが、ジャンソンから見てもサルトルは当然第三者であり、「彼自身」(lui-même)は三人称男性・単数形の強勢形としてジャンソンに対するサルトルを指示する。この書名においてサルトルと「彼自身」は言語法則上一致するが、ここでのサルトルが文筆家であり、文筆家はそのテクストの総体以外の何ものでもないのだから、その意味で事実としても当然一致する。そうした一致状態におけるサルトルが、ジャンソン(という著者)による記述の対象として措定されていることになるだろう。「彼自身」がフランシス・ジャンソンと一致する可能性は、ゼロとは言えないまでも、意味内容や語の位置関係さらには印字を含む表紙の間構成からみて、ほばない。そして「彼自身」はサルトルと一致するのだから、それをサルトルと置換えたとしても、実際上何の不都合も生じないだろう——多少おさまりが悪いことを除いて……。ところがこの場合、バルトが「彼自身」を彼自身でバルトに置換えたことによって、奇妙なことが生じる。まず「フランシス・ジャンソン」と同じ位置にあるべき「ロラン・バルト」が消去され——この

消去は「彼自身」にとつて替った「ロラン・バルト」との一致に基づくとも考えられるが——、そのかわり「による」には含まれた二つの「ロラン・バルト」の間に、あるずれが、戯れが生じ始めたのである。今日の言語的ないし文学的な制度においては、書名と著者名は明瞭に区別され、その間に戯れは生じない。著者名は、一人の著者を明らかに不在のものとして指示する——一般的には読者は具体的存在としての著者と関らない、そして読書が想像力の作用による不在の現前化であるとしても、現前化されるのは著者ではない。書名は、具体的には、今日の前にある一冊の書物を指示し、ついでこの書物の紙上に印刷された文字の連なり(によって支えられた意味の連なり)によって支えられた作品の世界を指示するだろう。読書の開始以前に、書物は現前し、作品の世界は不在である——どこにもない——が、読書によって現前化するのには、正にこの作品の世界であると考えることが出来るだろう(その場合物体としての書物の存在は否定され、不在化される。)読書の間、著者はつねに不在のものとして措定され、むしろ意識の対象ともならない。

『ロラン・バルトによるロラン・バルト』は、いったい

書名なのだろうか。たとえばその没後に刊行された書物についてみても、ある書物のビブリオグラフィでは、他の書名とともに『ロラン・バルトによるロラン・バルト』⁽⁷²⁾があげられているから、そこでは明らかに書名であると考えられるが、他の場合には、「同じ著者による」という標題の下に、他の書名とともに『ロラン・バルト』があげられており、その場合には「による」(par)の前(の後)が著者名でその後(その前)が書名ということになるだろう。書名と考えれば、生前に刊行されたこの本は、著者名を欠いていることになるし、そうでないとしたら、何故一般的慣行に従わず、書名と著者名の間に「による」による結びつきを作り、あたかも書名であるかのような見かけを与えたのだろう。いずれにしても、このいかにもバルトらしいしかけ(戦術)によって、著者、書名、書物……といったものが、在来の文学的・言語的制度の中に占めていた安定した場からずれ出したことは確かである。

一般的には、先にも示されたように、著者名は単に概念的に著者を指示するだけであり、読書という想像の営みが経過する間、著者は読者の意識から消える傾向にある。一方作品(本)の世界は、まさに想像的なもの(imagi-

naire)として、読書の営みによって、不在であるがままに現前化する。ところがこの場合には、「ロラン・バルト」によって指示される作品の世界が現前化するにつれて——この書物を単に概念的に読むことが出来るだろうか——、「による」による関係に置かれたもう一つの「ロラン・バルト」が指示するもの(著者)もまた次第に現前的になって行く。たとえば近代的なロマンは、文字、特に印刷文字による言表の起源からの切斷(desorigination)——それに伴う声の複数化、そして不在の全能者たる作者(Tauteurin)⁽⁷³⁾の誕生——などにその根拠をもつと考えられるが、ここでは断片化された言表は次第にその起源を明らかにして行き、それとともに全能の作者は消え失せ、文筆家バルトの体が見えかくれし始めるのではないだろうか。確かに『ロラン・バルトによるロラン・バルト』は、たとえばスーザン・ソントグの言うように、モダニズム小説の傑作と言えるかもしれない——それがリルケの『マルテの手記』に端を発する伝統に連なるかどうかは別に——が、しかしそれは明らかに一般的な意味での近代ロマンとは対極的な位置にあると言うべきだろう。見えかくれするのがあくまでも文筆者バルトの体であり、生活者バルトの

体ではないという点で——ここでの書くことを通して生物的条件ないし想像界（ラカン的な意味での）の制約下にある肉体は浄化されて文筆者の体になるのだろう——、それはまたこの国の私小説などとも異なるのだろう。あるいは次のようにも考えられる。「による」(par)の前(の後)の「ロラン・バルト」は、文筆者としての体をもった著者ロラン・バルトを指示し、その後(その前)の「ロラン・バルト」はこの文筆者によって書かれ、かつ著者によって検討の対象とされている資料体を意味する……。「描き、書き、分類する」という悦びに相應しいように注意深くしつらえられた」書齋に座り、自分自身の資料体と觸れ合っている文筆家バルトの体を想像してみたらどうだろう、そして「私の体は、その仕事の場に戻った時にだけ、全ての想像界から自由になる」のだという——そしてこの文は書齋で仕事をする自分自身の写真につけられたものだ。生物的肉体と資料体の間には、あまりにも大きな差異ないし距離が存在し、その間に戯れの生ずる可能性はおそらくないだろうが、文筆家の浄化され、自由になった体と資料体とは、「による」による関係づけあるいはずらしによって、自由な戯れを戯れうるのだろう。戯れ合う二つの体

(corps)、そしてもしその戯れが悦びをもたらすのだとすれば、それは確かに倒錯的だ。

ところでこれはバルトの言語活動を対象としたバルトの言語活動であるという点で、一つのメタ・ランガージュではないだろうか。そして、多くの文学史家(批評家)、美術史家(批評家)が、作者の言語活動による作者(作品)の記述をもって、作者(作品)の真実を定める第一の資料としていることを考えれば、そこにあの尊大さの生じる可能性はないのだろうか。確かにある、文筆家が、あるいは研究者が、それを第二度に固定しようとするならば——。

しかしバルトは、本来最も遠い所にあるかあるいはまったく合一するかであった二つの体の間に、ずれを作り出し、しかもそのからくりを明示している。最も戯れ難かったものが戯れ始めたのだから、その戯れは当然——その本性上からも——第二度で終熄することを望まれていない。だからたとえばバルト自身がこの書物についての書評を書くことも当然可能なだし——「ロラン・バルトによる『ロラン・バルトによるロラン・バルト』——、たとえば今書かれているこのテキストの題名を『ロラン・バルトによるロラン・バルト』によるロラン・バルト」とすること

だって可能なはずだ。その点からも、この書物は本来文学として、想像的に読まなければならないのだろう。そして読者は、あの二つの体の戯れを享受するとともに、あの二つの体と自らの読者としての体との戯れをも味わうことになるのだろう。個々の断片が、バルトがバルコンから投げ捨てた「あばら」の断片そのもののように思われることも、あるいはありうるのだろう。

ドクサ・バラドクサの絶えざる転位、しかしそれもまた、ある意味では、バルト自身による、ドクサ化するバルトの言説への、バラドクサの提起の過程にほかならない。彼の全ての仕事を貫いているこの根本的な運動そのものが「ロラン・バルトによるロラン・バルト」という趣きをもっているのかもしれない。濃厚な私的趣き、それもまた彼の「味わい」なのだろう。音楽についての彼のテクストはさほど多いとはいえないが、そのほぼ全てがシューベルト、シューマンに觸れていることは——そしてモーツァルトでもベートーヴェンでもないことは——非常に興味深いことのようにも思われて来る——ある意味でこの二人はその「味わい」において私的である音楽家だし、断片を愛し、突然の休止を愛用した作曲家なのであった。

註

- (1) この断片は、成城大学、東京大学における講義のためのノート、今道友信編「西洋美学のエッセンス——西洋美学理論の歴史と展開——」(ベリカン社、一九八七年四月)のロラン・バルトの項のための草稿(この草稿そのものは刊行の四年ほど前に書かれた)などを材料としている。
- (2) Roland Barthes: De l'œuvre au texte. Revue d'esthétique, 1971, repris dans "Le bruissement de la langue", Editions du Seuil, Paris, 1984, p. 71.
- (3) この手続は、たとえば「象徴と記号——芸術の近代と現代——」(勁草書房、一九八二年)などですでに試みられているとも言える。
- (4) Roland Barthes par Roland Barthes (RB), Editions du Seuil, Paris, 1975, p. 63.
- (5) RB, p. 166.
- (6) RB, Phases, p. 148.
- (7) RB, p. 129.
- (8) RB, p. 148.
- (9) R. Barthes: Leçon—Leçon inaugurale de la chaire de sémiologie littéraire du Collège de France prononcée le 7 janvier 1977 (L), Editions du Seuil, Paris, 1978, pp. 16~

17.

- (10) RB. La cotelette, pp. 65~66.
- (11) RB. p. 51.
- (12) R. Barthes: *Le grain de la voix* (GV), Editions du Seuil, Paris, 1981, p. 200.
- (13) それはある意味では想像力と現実界の関係にも類似するだろう。ケンタウロスが想像されるのは、ケンタウロスが現実界に不在であるからと言われる。cf. Jean-Paul Sartre: *L'imaginaire, Psychologie phénoménologique de l'imagination*, Gallimard, Paris, 1948, p. 234.
- (14) Leçon. p. 7.
- (15) cf. J.-P. Sartre: *Qu'est-ce que la littérature*, in *Situation II*, Gallimard, Paris, 1948, p. 72 sqq.
- (16) RB. p. 52~53.
- (17) RB. p. 118~119.
- (18) GV. p. 200.
- (19) RB. p. 70.
- (20) cf. Edmund Husserl: *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die Transzendente Phänomenologie*, Husserliana Bd. VI, Nijhoff, Haag, 1954.
- (21) R. Barthes: *Critique et vérité*, Editions du Seuil, Paris,

1966, pp. 54~55.

- (22) RB. p. 175.
- (23) GV. p. 260.
- (24) RB. p. 111.
- (25) *ibid.*
- (26) Friedrich Nietzsche: *Über Wahrheit und Lüge in außermoralischen Sinn*, in *Werke in drei Bänden*, 3er Band, Carl Hauser Verlag, München, 1966, S. 309ff.
- (27) F. Nietzsche: *Unzeitgemäße Betrachtung*, zweiter Stück, Vom Nutzen und Nachteil der Historie, op. cit., 1er Band, S. 282.
- (28) F. Nietzsche: *Aus dem Achtzigerjahre*, op. cit., 3er Band, S. 431~32.
- (29) RB. p. 76.
- (30) RB. p. 88.
- (31) RB. p. 70.
- (32) RB. p. 175.
- (33) RB. p. 77.
- (34) RB. p. 106.
- (35) *ibid.*
- (36) R. Barthes: *Le plaisir du texte* (PT), Editions du Seuil,

Paris, 1973, p. 81.

- (37) RB. p. 120.
- (38) L. p. 12.
- (39) *ibid.*
- (40) L. p. 13.
- (41) L. p. 14.
- (42) L. p. 15.
- (43) cf. Roman Jakobson: *Essai de linguistique générale*, traduit et préfacé par Nicolas Ruwet, Editions de Minuit, Paris, 1963, p. 47.
- (44) L. p. 15.
- (45) *ibid.*
- (46) *ibid.*
- (47) R. Barthes: *Sagesse de l'art*, 1979, repris dans "L'obvie et l'obtus", Editions du Seuil, Paris, 1982, p. 175.
- (48) RB. p. 82. なお註(47)のそれとちがひ、*「ハジメの〈sujet〉は必ずしも「の」の意味にのみ取られるべきではないが、ハジメはあえて単純化して捉えた。」*
- (49) J.-P. Sartre: *L'être et le néant*, Gallimard, Paris, 1943, p. 721.
- (50) *ibid.*

(51) L. p. 16.

(52) PT. pp. 50-51.

(53) R. Barthes: *Erté ou A la lettre*, 1973, repris dans "L'obvie et l'obtus", p. 99 sqq.

(54) R. Barthes: *Cy Twombly ou Non multa sed multum*, 1979, repris dans "L'obvie et l'obtus", p. 145 sqq.

(55) "Chambre claire"を始め「バルナ」は写真に関するテクストが非常に多い。彼の突然の死によつてついに開かれる「つなぐ終ったセミナールは「ブルーストと写真」とつなぐ」
題でなされたのは、ちがひなところ。

(56) R. Barthes: *Rhétorique de l'image*, 1964, repris dans "L'obvie et l'obtus", p. 28.

(57) RB. p. 59.

(58) cf. R. Barthes: *L'empire des signes*, Skira, Genève, 1970.

(59) GV. p. 150 sqq.

(60) L. p. 39.

(61) L. pp. 37-38.

(62) RB. p. 96 sqq.

(63) L. p. 42.

(64) GV. p. 198.

(65) *ibid.*

「」による引用文中の「」は、このテキストの書き手に
よるものである。

- (66) RB. p. 150.
- (67) L. p. 42.
- (68) RB. p. 97.
- (69) GV. p. 253.
- (70) RB. p. 75.
- (71) cf. GV.
- (72) cf. "L'obvie et l'obtus" et "Le bruissement de la langue."
- (73) cf. R. Barthes: S/Z, Editions du Seuil, Paris, 1970, p. 25
sqq. 浅沼「作者、その生と死——罗兰・バルトの所説を
めぐって」成城大学大学院「美学美術史論集」一九八四
年、参照。
- (74) Susan Sontag: Under the Sign of Saturn, Farrer, Strauss,
Giroux, New York, 1980. 富山太佳夫訳「土星の徴し」の
下「晶文社、一九八二年、一九六頁。
- (75) RB. p. 42.
- (76) ibid.
- (77) cf. R. Barthes: Le grain de la voix, 1972, La musique, la
voix, la langue, 1977, Le chant romantique, 1977, Aimer
Schumann, 1979, repris dans "L'obvie et l'obtus", p. 236
sqq.